誰も見たことのないアジア 次世代の表現者たち An Asia Never Seen Before Creators of the Next Generation

コミュニティに介入しながら大規模なプロジェクトを展開したり、より large-scale projects which simultaneously infiltrate local communities, to the leadership of 自由で直接的なメッセージを発するために独自のメディアやスペースを independent media forms and alternative art spaces towards a more direct and unrestricted 運営したり……。取り巻く環境や問題に対して敏感に反応する彼らの message...... In the activities of these artists, sensitively responding to surrounding 活動からは、まだ誰も見たことのない"新しいアジア"が見えてくる。 environments and issues, a "New Asia" yet to be seen by anyone is taking shape.

つかみどころのないその表ヒ番組の企画・出演といレーション、美術史に正常 るテ 東京・恵比寿にあるオルタナティブ・スペース『MAGIC ROOM???』にて。栗原自身、ここでさまざまな活動を行っている。 Photo taken at MAGIC ROOM???, Ebisu, Tokyo. Here, KURIBARA is carring out a range of activities.

なぜ型にはまらないのか?

ギャラリーに足を踏み入れた瞬間、目に飛び込ん できたのは自身をかたどった脚立に鉄製の彫刻、油 杉画、そして半紙に描かれた「どくろ興業」の文字 …。これが"同じことはやりたくない"をモットーに、 固人の制作からユニット『栗原森元』まで幅広い活

イルに固着したくないし、それじゃつまんない。毎回 with どくろオールスターズ』。 新しいことやって、ドキドキしたいしヒヤヒヤしたい」 「タイトルはわかりやすいでしょ? フェス=お祭りで

き、自由を体現している人だと思って。とくに今の時 すると、要素も増え、規模も大きくなるんですよね」 弋"自由"ってことが見えにくいんじゃないかな。僕は もし誰かに『自由ですか?』って聞かれたら『自由で す。とは答えられない。"自由"ってなんだろう。その 問いをひとつひとつ形にしていこうと思っています。

動をはじめたのも、「テレビに出ない?」というNHK カスカウトがきっかけだった。それから5年間、月に1 そのペースで観覧客が出すお題に沿った作品を、次 回放送までに制作・発表する番組の企画・出演・制

、鳥が冬に食べる牛脂でできています」 躍させるクセがあるんです」

きちんと美術史を勉強したらわかるかなと思った。そ れを『栗原森元』で実現したんです」

体育館に広がる"栗原ワールド"

2月23日(木)から10日間、3331 Arts Chiyodaの 僕はやりたいことがいっぱいあって、どれもこれも必体育館で栗原の大規模な個展が開催される。その 要性を感じてやっています。そうするとひとつのスタ 名も『F.E.S. 栗原良彰のFantastic Eccentric Show

いくつもの顔を持つ栗原だが、制作活動には一貫す。基本的に作品をつくるときにいつも考えているの は、美術経験がまったくない人も、美術の専門家も楽 「例えば"アーティストってなんだろう"って考えたと しめるもの。すべての人が楽しんでくれることを想定

> 『どくろオールスターズ』とは、アートコレクターとし て著名な岡田聡が代表をつとめる団体『どくろ興業』 に参画<mark>するアーティストのこと。従来のアートの制度</mark> にとらわれず、より社会に対して広い視点で活動し、メ ンバーも流動的に変化していく。

「今回は僕も『どくろオールスターズ』のメンバーであ り、僕以外にもさまざまな表現者が関わる展示にした い。僕は個人崇拝のような、個が尊重される状況はお かしいと思っています。だから、いろんなアーティスト 作に携わる。そして番組終了後も、栗原が徹底的に の関わりを促すような場をつくりたい。いま構想して 。 情史を研究して"先生"となり、森元が"生徒"とし いるのはアーティストのスタジオがいくつかあって、展

3. どくろ興業 Dokuro Kogyo

て絵を描くスタイルで活動を続けている。「美大に 示もできて、お客さんもアーティストも自由に行き来 入ったものの、セザンヌってどこがいいかわかんなくて。できるような流動的な場所。つくり手と直接話すと、 その作品が好きになっちゃうこと、作品が欲しくなる ことってありませんか? そんな場所をつくって、さら に年に1回大きな展覧会をやりたい」

> "見たことのない何かを見たい"と話す栗原が思い 描く場所は、かつてマンガ家が集い、部屋を行き来し ていたアパート『トキワ荘』の現代版ともいえるかもし れない。美術に関わる人もそうでない人もひとところ に集まり、まだ誰も見たことのないものが生まれる

Why won't he keep to one form?

What leaps out at us as we first step into the gallery is a metal ladder in the shape of the artist's body, along with an oil painting and then a piece of plain paper on which the phrase "Dokuro Kogyo" (skull enterprises) is written...This is the world of Yoshiaki KURIBARA who, with the motto "I don't want to do the same thing", has pursued a wide range of activities from production of his own personal work to projects as the collaborative unit "KURIBARA MORIMOTO".

"You know there are so many things I want to do, and I am doing this and that while feeling they are all necessary. I always want to do something new, I always want to be excited and challenged." KURIBARA is an artist with many faces, but there is

someone who embodies freedom. Especially in something very hard to

identify, don't you think? What is freedom? Little by little, I want to take this question and build it into some form " It was the suggestion

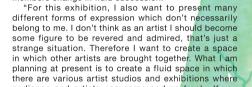
of an NHK head hunter which first brought KURIBARA into collaboration with his then classmate Ryo MORIMOTO, producing a television program together for 5 years. Even after the program series finished, they have continued to use a similar approach, where KURIBARA becomes the "teacher" painstakingly researching the history of art while MORIMOTO becomes the "student"

"Dokuro Kogyo', which appeared in Odate, Akita my work. And actually my family are poultry farmers, so birds are something quite familiar to me. In this work it is written 'Birds with pessimistic dreams can't fly', but this bird is made from beef suet which we eat in winter."

"In the work I presented in Odate, Akita lused a tree from the areas devastated by the earthquake as a brush. I added mud to this brush and drew pictures. I always have a habit of making something small leap to something big."

"Dokuro Kogyo', which appeared in a scene of my film "Strange Right Hand" will also appear in the upcoming and to this brush and drew pictures. I always have a habit of making something small leap to something big."

"When I entered art



understand what the fuss was about Cezanne. But I

thought if I studied art history properly then I probably could understand. It is this that I have realized through

unfurling within the sports hall

From 23rd February for 10 days KURIBARA will be

presenting a large-scale solo exhibition in the sports hall of 3331 Arts Chivoda, entitled "F.E.S. Yoshiak

KURIBARA's Fantasic Eccentric Show with Dokuro All

"The title makes it easy to understand, right?! F.E.S.

is a festival. Whenever I am making work I always

think about the enjoyment of people who have no experience of art, as well as art specialists. If you

assume that everyone is going to have fun then the

The "Dokuro All Stars" are the artist members of the

organization Dokuro Kogyo led by art director Satoshi

OKADA who is more widely known as an art collector Taking a broader perspective of society, they pursue

a wide range of activities not limited to existing art

conventions in an organizational structure where

the activities of 'KURIBARA MORIMOTO'."

The world of KURIBARA

work becomes really large-scale.'

members change in fluid succession.

can talk directly with the person who is making the it, and even want to buy it. I want to create this kind of platform and then continue to hold a large-scale exhibition once every year."

With his desire to "see something that hasn't been seen before", the space envisioned by KURIBARA can be likened to a modern version of the "Tokiwaso" apartment in which young manga artists formerly gathered in creative exchange, later to become leaders of the field. Here, those involved in art and those who aren't will merge together in one place sharing excitement towards a future giving shape to something no one has ever seen before.

栗原良彰 / Yoshiaki KURIBARA

1980年群馬県生まれ。現在、東京藝術大学大学院博士過程在 籍中。森元嶺と『栗原森元』としてユニット活動も行う。主な 展覧会に2010年『第2回恵比寿映像祭関連企画』(magical, ARTROOM、東京)、2007年『UNLIMITED』(アプリュス、 東京)、2007年『Oコレクションによる空想美術館』(トーキョー ワンダーサイト本郷、東京)など。





「上]大学院修了制作の『ININOUTOUT』(東京藝術大学取手校地、茨城、2010年)。「不自由だが確実な自 11をつくり出そうと思って、内側も外側も存在しない壁をつくった。 そこには壁というもので束縛されてはい るが、確実にひとつの自由が存在するはず」[下]個展『トウキョウユートピア』(magical, ARTROOM、東京、 2007年)。鳥とフェンスとコーンをテーマに構成したインスタレーション。「アトリエのまわりにあるコーン畑は 緑のフェンスで囲われ、畑の上にはたくさんの鳥が飛んでいます。その関係性や役割、意味性を再構成しました! Top] KURIBARA's MA graduation work "ININOUTOUT" (Tokyo National University of the Arts, Toride Campus, raki, 2010). "Even if I am not free I wanted to create a certain freedom, so I made a wall which has no inside o whibition "Tokyo Utopia" (magical, ARTROOM, Tokyo, 2007). An installation based on the theme of birds, a fence nd corn. "Around the area of my studio there are corn fields surrounded by green fencing, and above these university I couldn't fields many birds fly. Here I attempt to reconstruct the relations, roles and meaning of these different elements.

コミュニケーションツール としての服

西尾をアーティストの道へと駆り立てたのは、アー トではなく幼い頃に興味を持ったファッションだっ た。小学生のとき、好きだったバスケットボールのユニ フォームを普段着として着たことがきっかけで、身に つけるものが自分を表現することに気づいた。成長に つれ、自分を"装う"行為は徐々にエスカレートし、中 学生時代にはワンピースやスカート、手づくりの下駄 などを履いていたという。

「当時はあらゆる服装や髪型を試して、周囲を驚かせ たかった。僕が作品のテーマにしている『装いの行為』 とは、人間が自分の体を加工する過程、そのすべてを 指しています。 人は裸で生まれても、周囲が決めた慣 習などによって、決して裸ではいられなくなる。それ は全人類に共通したことですよね。ただ育つ環境に よって『装い』の方法や種類は変わっていきます。そ うした、誰もが当たり前に実践している事象に働きか け、新しいコミュニケーションや装いを生み出してい きたいというのがアーティストとしていちばんのコン

ナイロビだからこそ試せること

西尾は2011年9月より、本格的にケニア共和国の 首都・ナイロビを拠点に活動している。最先端のアー トが集まるヨーロッパやアメリカ、また近年急激な成 長を続けているアジアでもなく、彼が選んだのはアフ

「ケニアでは安定した職が保証されている人は少な く、みんなどう生き抜いていくかということを日常的 に考えています。時間も好奇心もあり、常にビジネス チャンスを探しているため、コトを起こそうとすると 『忙しいから』と断られることはありません。アフリカ を初めて訪れたのは旅行でしたが、『ここならアート を通して僕のやりたいことがダイナミックに試せるの ではないか』と可能性を感じたのです」

ナイロビに注目した西尾は活動の拠点を『西尾 工作所ナイロビ支部』と称し、2009年に『ナイロビ・ アートプロジェクト』をはじめた。偶然すれ違った人 と衣服をそっくりそのまま交換する『Self Select in Nairobi 2009』や、集めた古着で市民と協働して町 の巨大な喪失物をパッチワークで再建するアートプロ ジェクト『Overall Project in Nairobi 2010』など、そ れまで国内でも行ってきた服や布を素材とするプロ



old steam locomotive was recreated from a patchwork of old clothes and paraded along the railway line.

知数なアフリカでは、どのようなコミュニケーションが

a City of Surviva

Yoshinari NISHIO (日本/Japan)

ケニア共和国を拠点として活動している。

アートプロジェクトを「社会デザイン」だと話す西尾美也は、これまで

「装いの行為」や「コミュニケーション」をテーマに国内や海外など

各地でプロジェクトを展開してきた。西尾は現在、東アフリカの

Yoshinari NISHIO talks of art projects as "social design".

Having pursued themes relating to "the behavior of dress"

and "communication" expressed through clothes in various

projects throughout Japan and internationally, NISHIO has

now established his base in the Republic of Kenya.

「ここでアートプロジェクトを行うとき"アート"とし てではなく、彼らと共有できる方法でアプローチする ほうが、多くの人を巻き込むことができます。現地の 人は楽しんでくれたり、新しい発見だといってくれま すし、それは嘘ではないと思う。でも、アートの経験 を彼らの日常にどう接続させ、発展させられるのかは まだまだ模索中です。こうしたプロジェクトを資金面 で継続的に続けていくことも今後の課題です」

最近では自宅を『Home_N Gallery』と称して住み 開き、ナイロビ市内のさまざまな家の窓から撮影した 写真や、ナイロビの地図に来場者それぞれがお気に入 りの場所をマッピングするプロジェクトなどを展開し

今は服を用いた作品からより自由になり、西尾工作 所ナイロビ支部のメンバーと一緒に、『この地でやり がいのある"アート"とは何か?』を探っています。そ れらのプロジェクトはこれまで続けてきた服の作品に 還元されるものと考えています」

西尾は異国の地でさまざまな実験を繰り返すなか で、作品テーマの追求とともに、時代を生き抜くケニ アの人びとに触発されている。

「僕らアーティストはアートと商業をつい切り離して しまいがちですが、ビジネスに前向きなケニアの人を

見ながら、アートをいかに ビジネスとして面白くでき るかを考えていきたい。ま アーティストがケニアで滞 在制作する機会も企画し ています」

Clothes as Communication Tool

What led NISHIO to pursue initially not an interest fashion stemming from elementary school student, it was through wearing his favourite basketball uniform as everyday clothing that he came to realize what [上] 代表作のひとつ『家族の制服』。昔の家族写真をもとに、同じ服を再現し、同じ背景、同じアングルで you wear is a form of expression. As he grew 撮影する。 これは3331のエントランスに2011年3月から設置されている作品。 「下] ナイロビ・アートプ ロジェクト『Overall Project in Nairobi 2010』。古着で蒸気機関車を再建し、線路上でパレードを行った。 older his experimentation [Top] One of NISHIO's key works "Familial Uniform". Here NISHIO takes old family photos and reconstructs them, recreating the exact clothes and re-photographing the family members in the exact same spot. This work is installed by the entrance of 3331. [Below] "Overall Project in Nairobi 2010." A project in which an with fashion behaviors escalated, with episodes

and skirts in his Junior High days and making his own andmade "geta" Japanese clogs.

「Overall Project in Nairobi 2010」の制作風景。パッチーワークを縫う西尾 (右) とプロジェクトメンバー(左)。 A scene from the production of the "Overall Project in Nairobi 2010", with NISHIO (right) and project member (left) sewing a patchwork

サバイブする町

"At that time through experimenting with clothes and hair style I wanted to surprise people. In my work which deals with the behavior of clothes, I try to point to the entire system in which humans transform neir bodies. Even though we are born naked, the customs which surround us ensure that we do not eturn to such a state. This behavior is universal However, depending upon our environment our way of dressing differs. As an artist I want to take hold of this phenomenon which everyone practices and set it to work in the creation of a new form of communication

Experiments in Nairobi

NISHIO has made Nairobi, Kenya the base for his creative practice since 2011. With cutting-edge artists n Europe and America and strong developments in Asia in recent years, why did NISHIO decide upon Africa?

In Kenya, few people have a secure long-term job, everyone has to consider how to survive. People here have more flexibility with time and are constantly seeking some business opportunity, so if something happening they don't give the excuse that they are too busy, they show interest in what is going on. I first came to Africa on holiday but I really felt the dynamic ossibilities of testing out the things I wanted to do

Establishing his base in Nairobi as the "NISHIO Workshop Nairobi Office", NISHIO began his activity here in 2009 with the "Nairobi Art Project". As part of this project he realized the work "Self Select in Nairobi 2009" in which he exchanged clothes with passers-by on the street, as well as "Overall Project local residents to recreate a lost emblem of the city on a grand scale using old clothes in a patchwork In a context where the value and appreciation of ar

communication has been born through such projects' labelling the activity as art it is better to approach more through a method which can be widely shared with the community, thus making it possible to involve more people. Here people express their enjoyment in taking part and are verbal about making new discoveries. However I am still exploring how to link

art to everyday life here and further its development. It is also a future challenge to make such a project

NISHIO has opened up his home as "Home N Gallery", recently exhibiting a series of photographs taken from the windows of various Nairobi residents' project in which visitors to the gallery may add their

"Here I am freeing myself from work which uses only clothes and, together with the members of NISHIO Workshop Nairobi Office, I am searching for a form of art which can fulfill something in this place. I think the kind of projects I am developing now are a kind of reinterpretation of the clothes projects which I have focused on until now."

While working in a different country and repeating various experiments in the pursuit of a particular concept, NISHIO has also been inspired by the people

of Kenya who push to survive the current era.

"As artists we often distance ourselves from the relation between art and commerce, but in observing the business-orientated people of Kenya, I have come to think that art can also be interesting as a form of business. Having the opportunity to pursue my activity allows me as an artist to really reflect upon what I am doing. I am therefore also trying to make opportunities for artists in Japan to come and stay and make work

西尾美也 / Yoshinari NISHIO

1982年奈良県生まれ。東京藝術大学大学院博士後期課程 修了。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロ シェクトを国内外で行う。 現在、平成23年度文化庁新進芸 術家海外研修制度2年派遣研修員として、ケニアのNairobi Arts Trust/Centre for Contemporary Art of East Africaに在籍。2009年に西尾工作所ナイロビ支部を設け ナイロビで「ナイロビ・アートプロジェクト」を開始した。

Born in 1982, Nara prefecture, Graduated from the doctoral course of Tokyo University of the Arts. He has undertaken various projects in Japan and internationally dealing with the behavior and communication of fashion. He is currently participating in a two-year program of research in association with the Nairobi Arts Trust / Centre for Contemporary Art of East Africa with the support of the Program for Overseas Studies for Uncoming Artists administered by the Japan Cultural Affairs http://voshinarinishio.net/

西尾美也をめぐる3つのキーワード Yoshinari NISHIO's 3 key words

1.90年代の ファッション シーン Scene

2. ワークショップ Workshop 3. 『ものぐさ 蛙 油 分析 。

interested in fashion, the styles of this workshops.

period had a big impact on me."

「僕が中学生のとき、インディーズファッショ 奈良の実験的アトリエ『neomuseum』 「高校生のときに読んだ本です。世の中

Photo: Mitsue UEDA

ファッションシーンはとても刺激的でした! の創設者・上田信行さんでした。

ンが台頭しており、雑誌『FRUiTS』が創刊 で行ったワークショップの様子。これが の『常識』や『当たり前』を徹底して見 されたのもこの頃です。ファッションへの興 僕の活動のはじまりです。ワークショッ 直す筆者の視点が、現在の僕の"コミュ 味が高まっていた僕にとって、この時代の プに出会うきっかけをくれたのは、ここ ニケーション観 "をかたちづくっている と思います」 "When I was a junior high school "This is an image of my debut "I read this book when I was in high

精神分析』

Shu KISHIDA.

Psychoanalysis

"Boredom

student, indies fashion came to the fore and the magazine 'FRUITS' was released. As I was increasingly becoming the one who encouraged my interest in the one who encouraged my interest in the one who encouraged my interest in granted and understood as common many than the one who encouraged my interest in the one who encouraged my int current sense of communication

▶ 栗原良彰 個展『F.E.S. 栗原良彰のFantastic Eccentric Show with どくろオールスターズ』詳しい内容はPI6へ!

「作品によく使うモチーフに卵や鳥があり 「2011年に秋田の大館で展示したこの 「以前つくった映画『Strange Right

ます。というのも僕の実家は養鶏場で、身 作品は、被災地の木を筆に見立てたもの。 Hand』のあるシーンに登場する見世物。

近なんだよね。この作品は『悲観的な夢を その筆に泥を付け、絵を描きました。僕、『どくろ興業』は、3331の展示で『どく

見る鳥は飛べない。って書いてあるんだけ、なんでも小さいものを大きく見せる、飛 ろオールスターズ として登場します。お

栗原良彰をめぐる3つのキーワード Yoshiaki KURIBARA's 3 key words

2. 飛躍 Leap